



わたしの『善知識(ぜんぢしき)』

わたくしごとになります。平成20年の5月、まだ9歳だった姪(めい)が亡くなりました。白血病でした。私にとっては唯一のきょうだいである姉が、我が子の棺にすがって泣く姿を見ながら、胸がしめつけられる思いでした。



姪の涼佳(すずか)ちゃんは、私の上の娘と同級生で、たまに実家に戻ったときにはいつも仲良く遊んでいました。葬儀に参列した当時9歳と6歳になる娘たちもまた、親しいとこの死に、何かを感じとっていたようです。

「世の中はどうしてもこんなに悲しいことが起こるんだろう…」世の無常を改めて思い知らされた出来事でしたが、姉のご主人が葬儀の挨拶で話されていた言葉が、今も耳に残っています。

娘の涼佳は、4歳のときに発病しました。6年近く、頑張っって病氣と闘ってきました。苦しい抗ガン剤治療や、骨髄移植の後に起こる拒絶反応にも耐えてきました。

その間入退院を繰り返していたので、学校のお友達と遊んだり、家族で出かけたり、家でのおんぴりと過ごしたり…、そうしたごく普通の、あたりまえの生活がなかなかできませんでした。しかしその分、一緒にいられる時間が本当に幸せでした。

この子は私たち夫婦に、周りの人たちに、そうした「あたりまえのこと」がどれだけ幸せなことなのかを教えるために、生まれてきてくれたのだと思います。9年という短い時間しか一緒にいてやれませんでした。涼佳はこれからもずっと、私たちをそばで見守っていてくれると信じています。

この言葉を聞きながら、葬儀に参列していた同級生の親御さんたち・そして私も、無意識のうちに我が子の肩を強く抱いていました。

浄土真宗では、仏縁に導いてくださる方・真実に目覚めさせてくださる方を「善知識(ぜんぢしき)」と呼びます。涼佳ちゃんは、姉夫婦にとっての、私にとっての、会場にいたすべての人たちにとっての「善知識」でありました。

どなたにも、先にお浄土へ往かれた「わたしの善知識」がいらっしゃると思います。日常に追われそのことを忘れがちな私たちに、「善知識」の方々はいつも語りかけてくださっているのかもしれませんが。ある先生は、次のようにおっしゃいました。

「亡き人を、案じるあなたが、亡き人から案じられている」と…。

